

酒が高知か高知が酒か

—『竜馬がゆく』から見る「高知と酒」—

高橋 俊

はじめに—高知、坂本龍馬、酒

「高知といえど？」と聞いて、かならず出てくる答えが「酒」であろう。首都圏と関西圏エリアにおいて行った「高知県イメージ調査」の「高知イメージ純粋想起」において、「酒」は6位となっている¹。意外と低い感もあるが、それでも、「高知と酒」が切っても切れないものとしてイメージされていることは間違いあるまい²。

高知市出身の俳優・広末涼子はインタビューでこう語る。

そもそも、出身が高知県で、自分の周りごとにかく酒豪ばかりだったということが大きいんですけど…。親戚や地元の友達との飲み会では、みんな何かにトライアルしているんじゃないかってぐらい、朝までひたすら飲み続ける。明日の心配とかはどうしてもよくて、やり切り、たいんですよ（笑）³

同じく南国市出身のタレント・島崎和歌子はこう語る。

タレント、島崎和歌子（46）が4日、東京都内で行われた出身地の高知県をPRする「高知家プロモーション発表会」に出席。18の酒蔵の日本酒が並び、「全部飲みきれ自信がある。高知の人にとっては水みたいなもの」と酒豪ぶりを告白⁴。

また、高岡郡仁淀村（現仁淀町）出身のライター・吉田類はこう語る。

——本書は、類さんの出身でもある高知の、土佐流の宴席風景からスタートしていますね。高知にはやはり格別な思いがありますか。

© 高知大学人文社会科学部 人文社会科学科 国際社会コース

¹ 高知県 産業振興推進部 地産地消・外商課「第14回高知県イメージ調査結果報告書」（https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/120901/files/2017122700433/file_20211251120211_1.pdf/ 2023年3月11日 最終閲覧。本稿におけるURLの最終閲覧日はすべて同日である）。1位から5位まではそれぞれは「カツオ」「坂本龍馬」「四万十川」「桂浜」「土佐」である。

² 都道府県別1人あたりアルコール消費量（国税庁調査）でも、令和元年度において高知県は東京に次いで2位となっている（<https://www.nta.go.jp/taxes/sake/shiori-gaikyo/shiori/2021/pdf/042.pdf/>）。

³ 「『広末涼子とおでんでハシゴ』：語ってくれた、僕らが知らないヒロスエのこと」（<https://www.webuomo.jp/foodie/62687/>）

⁴ 「酒豪島崎和歌子、日本酒は「高知の人にとって水みたいなもの」」（<https://www.sanspo.com/article/20190605-FDYK4I4B5NNYPGU56P2NM2V2Q4/>）

吉田：あります。高知は古くは『土佐国風土記』逸文に酒の産地として紹介された地。高知県立文学館で「酒と文学展～『土佐日記』から吉田類まで～」という企画展（2017年11月から翌18年1月まで）が開催されましたが、県民は大変に酒好きが多く、おそらく日本全国どこよりも酒を中心にして結束を強めてきた地域だと思っています。そして、酒宴の席では誰もが平等です。

というのも、高知で酒を飲む時はたいてい車座。車座ということは、座敷の真ん中にお酒の神様がいて、神様を囲んで飲むということです。神様を除き、そこに居合わせた人は、みな平等というのが高知の酒席の特徴だと思います。身分の上下がないから、年若い人が年配者にぱっと盃を差し出してもいい。酒を受けたらすぐ空けて、今度は返杯でお酒を注ぎ返して、受けた人はまたすぐ盃を干して……。そうやって延々と返杯を続け、みんなで潰れていく。(笑)

ご存じの通り、高知県は自由民権運動の中心的な役割を果たした地。その理論的指導者だった中江兆民も植木枝盛も高知出身です。それが酒宴の席にも表れていると思っています。本書のタイトルは『酒は人の上に人を造らず』ですが、これは福沢諭吉の「天は人の上に人を造らず」に着想して僕が作りました。⁵

高知市のHPにも、「『酒国・土佐』とよばれるほど、老若男女問わず酒好きが多い土地としても有名な高知の酒文化は、今も脈々と受け継がれています」⁶と書かれている。また、ベストセラーとなった『キリンビール高知支店の奇跡』において、著者の田村潤は「高知は宴会が多くて、赴任した瞬間からありとあらゆる宴会に引っ張り出されました。数えてみると年間270回以上も宴会に出ていました」「おかげで糖尿病、高血圧、痛風になりました」⁷と述べている。

本稿は、現在定着している「高知と酒」のイメージについて、司馬遼太郎『竜馬がゆく』を中心に考察するものである。

1 龍馬の酒、高知の酒

「高知と酒」に関して、重要人物の1人として挙げられるのは、坂本龍馬であろう。いうまでもなく、坂本龍馬は高知県の最大のアイコンであり、観光の大きな目玉になっている⁸。そして坂本龍馬と酒を結びつけるイメージも一般的であり、たとえば安芸市の酒造メーカー・菊水酒造⁹は龍馬の名を冠した焼酎やラム酒を製造・販売している。

ここでは、坂本龍馬の「実像」（「実は酒に弱かった」のような）ではなく、「龍馬と酒」のイメージについて検討していく¹⁰。

⁵ 「『酒は人の上に人を造らず』／吉田類インタビュー」（『web中公新書』<https://www.chuko.co.jp/shinsho/portal/105698.html/>）。

⁶ <https://www.city.kochi.kochi.jp/site/kanko/sakebunka.html/>

⁷ 田村潤『キリンビール高知支店の奇跡—勝利の法則は現場で拾え！』（講談社＋α新書、2016）pp.31-32。

⁸ シートン・フィリップ「歴史コンテンツとツーリズム—坂本龍馬と高知市の事例—」（『CATS叢書』8、2016）。また中村容子「高知市のNHK大河ドラマによる観光振興」（『地理空間』9-2、2016）も併せて参照。

⁹ <http://www.tosa-kikusui.co.jp/>

¹⁰ 坂本龍馬のイメージについては、知野文哉『坂本龍馬』の誕生—船中八策と坂崎紫瀾—（人文書院、2013）

坂本龍馬を描いた最初期の小説であり、龍馬が「明治維新の功労者」として顕彰されるきっかけとなったといわれる坂崎紫瀾『汗血千里の駒』¹¹には、意外なことに、酒宴のシーンはほとんど出てこない。数少ない酒宴シーンも、坂本龍馬とはまったく関係がない場面である。

現代に至る坂本龍馬像を作り上げたのは、なんとといっても司馬遼太郎¹²『竜馬がゆく』¹³であろう。『産経新聞』夕刊に1962年6月21日から1966年5月19日にかけて連載され、のちに単行本化されたこの小説は、司馬遼太郎が書き上げた数多くの小説の中でもダントツの売り上げを誇る¹⁴。なお、高知とは縁もゆかりもなかった司馬が『竜馬がゆく』執筆に至ったきっかけは、一般的には作家デビュー後、高知出身の後輩記者の勧めによるものとされるが¹⁵、「中学時代に同級生に将来の進路を聞かれた際には、「[家業の] 葉局はせえへん。俺は新聞記者か小説家になる積りや。ジンギスカンか坂本龍馬の本を書くで」¹⁶と答えていたという証言もある。

その『竜馬がゆく』には、冒頭の「土佐者は酒を茶のように飲む」¹⁷からはじまり、飲酒のシーン、もしくは酒にまつわるシーンがたびたび登場する。

「なに土佐者などは」

と島村は遠慮し、

「土佐っぽと蔑称されるごとく血の気が多いばかりで思慮が足りず、酒を飲むだけが芸でござるよ」¹⁸

「大胡先生は、いかほどお飲めになります」

「少々は」

「はあ、二升でござるか」

と大野憲子「戦前における坂本龍馬イメージの変遷—新聞記事を中心に—」（『古家實三日記研究』4、2004）をおもに参考にした。

¹¹ 同小説は『土陽新聞』に明治16（1883）年1月24日から9月27日まで全68回にわたり連載された。本稿では岩波文庫版（『汗血千里の駒—坂本龍馬君之伝』林原純生校注、2010）を用いた。『汗血千里の駒』については知野文哉「坂崎紫瀾と土佐明治維新史の形成—「汗血千里の駒」を中心に—」（『鷹陵史学』46、2020）等も併せて参照されたい。

『土陽新聞』は1877年に高知県で創刊された。その後休刊と復刊を繰り返し、1941年に『高知新聞』と合併。

¹² 司馬遼太郎は本名福田定一、1923年に大阪市浪速区の薬屋に次男として生まれる。大阪外国語学校（後の大阪外国語大学、現在の大阪大学外国語学部）蒙古語部に入学し、学徒出陣により満州へ渡り、戦車兵となる。敗戦後帰国し、いくつかの新聞社で働いた後、産業経済新聞（後の産経新聞）に入社。記者として働きながら小説執筆を始め、1958年に『梟の城』でデビュー、直木賞を受賞する。以後、『竜馬がゆく』をはじめ数々の歴史小説を執筆する。1996年逝去。

¹³ 本稿では1974年発行の文春文庫版を使用し、引用は「第1巻101ページ」を「①101」と記す。なお以下では、『竜馬がゆく』の作中人物に関わる部分は「竜馬」とし、それ以外は「龍馬」と表記する。

¹⁴ 福間良明『司馬遼太郎の時代—歴史と大衆教養主義』（中公新書、2022）。同書によると、『竜馬がゆく』の総発行部数は2477万5500部であり、2位の『坂の上の雲』1976万6500部を大きく上回る。

¹⁵ 窪内隆起「司馬遼太郎と『竜馬がゆく』」（『高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会論集』第4号、2012）によると、「引き受けたものの、新聞連載は司馬さんには初めてのことであり、なかなか主題が決まらなかった。[...] そんな折り、産経の記者で、司馬さんの後輩であり、私には先輩になる高知出身の渡辺司郎さんが、「土佐の坂本龍馬を書いてほしい」と言ってきた。龍馬の名は知っていたが、そう言われても殆ど興味が湧かなかった。しかし渡辺さんはしきりに「龍馬を書いて」とせがんできた。[...] 維新関連の史料を調べる中で、坂本龍馬という名があちこちに出てくることに気付いた。[...] 事前調査を重ねた末に「龍馬を書く」と決めた」。窪内は『竜馬がゆく』連載中の司馬遼太郎担当記者であり、やはり高知出身である。

¹⁶ 前掲福間『司馬遼太郎の時代』p.26。

¹⁷ ①32

¹⁸ ①190-191

「いや、少々でござる」

「升々でござろう」

これが土佐の悪風である。遠来の客が酔いつぶれて血へどを吐きそうになったところを見とどけてから、

——本夕の接待はうまくいった。

と安堵するのだ。そういう接待法の狂信徒のようなのが、馬太郎と為之介である。¹⁹

ここに挙げたのは全編におけるごく一部であり、小説中の「竜馬と酒」あるいは「高知と酒」にまつわるエピソードは数え切れないほどである。一方で、作品中の飲酒描写が、「明るい酒」ばかりではけっしてないことにも、注意が必要であろう。それは、上の引用で「土佐の悪風」と語られていることからもうかがえる。

さらに見ていくと、『竜馬がゆく』において、土佐を田舎、土佐人を田舎者とみなす描写が頻出していることがわかる。

(やっぱり、田舎者なんだわ)

しかし、ふしぎな模様の入ったはかまをはいていた。一見、寛文のころの伊達者のようにもみえる。江戸でしゃれ者といえど大藩の留守居役ときまったものだが、それでもいまだきあいうはかまを穿いている馬鹿はいない。²⁰

「遊びは、やはり江戸でございますよ」

「そんなものか」

「京大坂には、またそれなりの風情はございますけど、江戸の人は遊びというものを心得ていらっしゃいます。お国もとの土佐はいかがでございますか」

「土佐の高知には、二十四万石のお城下町でありながら、色里というものがない」

「まあ。それでは血気の若侍などは、どのようにして血をお鎮めなさるのでございましょう」

「浜辺でむやみと角力をとったり、剣術をしたり、水練をしたりする。とりわけ土佐はむかしから角力のすきな国で、藩でも歴世若侍にこれを奨励して、精気を土俵に埋めさせてしまう」

「色里で女衆とあそぶかわりに角力をなさるとは、なんとあらあらしい。江戸のお旗本衆は、左様な不粋はなさいませぬ」²¹

「そんなに江戸はいいかな」

重太郎は江戸っ子だからほめられるとわるい気がしない。

「やはり、二百数十年の累積というかな。人情というものの磨き、田舎とはちがう。人と人との触れあいに、諸事、こまごまと人情がゆきわたっている。徳川家代々の功績は、こういう町をつくったことだな」

「しかし土佐の高知もよかったろう」

「あれは、田舎、田舎」

¹⁹ ②233

²⁰ ①106

²¹ ①242

竜馬はたてつづけに飲んで、もう二合入りの徳利を二つも空けている。

「酒ばかり飲みくらって、若侍が三人も集まれば天下国家ばかりを論じちよる。それも目鯨をたて、自分が立ちあがらねば日本がほろびるとシンから思っちよる。日本を馬鹿にする異国人には、土佐鍛冶きたえの刀の切れ味を味わわさにゃならんと思っちよる」²²

もっとも土佐は南国のせいか他国とくらべて未婚の男女の交際の自由な土地で、娘を持つ家へは若い男女がしきりと集まり、娘の親のほうも酒肴を出して歓待する。集まった男女がそれぞれ左衛門節や浄瑠璃など芸をきそいあって二番鶏がなくあげ方まで楽しむのだ。そういう若い訪問客のことを土地では「カイツリさん」といった。²³

小説において「土佐の悪風」としてしばしば取り上げられるのは、「上士と郷士」である²⁴。『竜馬がゆく』では、「土佐藩ほど上下の身分のやかましい藩はない。たとえば、郷士の分際の者がいかに英才のもちぬしであろうとも、藩政に参加する身分にはとうていなれない」²⁵のように、この両者の争いが繰り返し描かれる。

竜馬は、この場では謀叛人になった。

これが、土佐の藩風であった。軽格が上士に「味方どうし」といっただけで、狎れちよる、謀叛であるという奇妙な論理がなりたち、即座に無礼討にされても、上士におとがめなしという国なのである。

(つまらん藩じゃな)

広い江戸や京大坂を見ている竜馬には、わが故郷ながらなんとも腹の底冷えるほどに愚劣な藩であり、つめたい国柄であった。²⁶

この「上士と郷士」は、「土佐藩の旧弊」の代表的なものに見なされていくことになった。2010年のNHK大河ドラマ『龍馬伝』でも、「上士と郷士」の争いが大きなファクターとして取り上げられている。龍馬ら郷士が上士たちから侮辱を受けるシーンが繰り返し描かれ、この屈辱こそが、龍馬の人格形成に大きな影響を与えた、というストーリー展開がなされるなど、「遅れた土佐」を象徴するエピソードとなっている²⁷。

『竜馬がゆく』において土佐を田舎とみるこうした視線は、いうまでもなく、著者である司馬遼太郎のものである。司馬遼太郎は大阪の商家の出身で、きわめて合理的な感覚の持ち主だったとよ

²² ①374

²³ ①325-326

²⁴ 「上士と郷士」は、旧藩時代にはその名称はなく、明治以降に用いられた用語である。前掲知野「坂崎紫瀾と土佐明治維新史の形成」によると、『汗血千里の駒』は冒頭に「上士と郷士」の対立（井口村刃傷事件）のエピソードを置くが、これは連載当時の自由民権主義思想の影響を受けたものであり、「[上士と郷士の]対立構造を単純化して説明するフィクショナルな言説」であるという。

²⁵ ①58

²⁶ ②206

²⁷ 2023年4月～9月に放送されたNHK連続テレビ小説「らんまん」は、高知出身の植物学者・牧野富太郎を主人公とするが、「本家と分家」「武士と商人」「雇い主と使用人」などの身分の差異が強調される内容となっている（木村隆志「朝ドラ「らんまん」早々に不評の声が飛び出すワケ」『東洋経済ONLINE』2023年4月14日 <https://toyokeizai.net/articles/-/666518/>）。

く語られる。大阪という都会で生きてきた彼にとって、高知（土佐）は「異世界」であり、そのまなざしは「オリエンタリズム」²⁸と呼ばれるものであったとも推測できる。『竜馬がゆく』をはじめ、司馬遼太郎の作品には、作者である司馬の「語り」がしばしば登場することはよく知られているが、竜馬を通して語られる「あれは、田舎、田舎」「つまらん藩じゃな」「愚劣」のような価値判断が、実際には作者である司馬遼太郎自身のものであることは、いうまでもない²⁹。「土佐は南国のせいか他国とくらべて未婚の男女の交際の自由な土地」という記述も、「文明人」が「未開人」を見るとき典型的な描写といえるだろう。

司馬遼太郎自身はまたこう述べている³⁰。

豊臣時代、大坂城下の町民たちがはじめて土佐武士というものをみた。土佐の長宗我部氏が秀吉に降伏し、大坂へのぼってきたのである。首長の長宗我部元親は屈強の家臣五十人をひきつれ、海路大坂に入った。沿道に見物がひしめいたが、みな、はなしにきく土佐人というものの風体におどろいた。

——その風体、野盗に異ならず。

という。遠い海のそとから蕃族かなんぞがやってきたような異様さをひとびとは感じたであろう。

人間については四国を南北にへだてる脊梁山脈が巨大な障壁になって他国との往来を隔絶させている。四国山脈の隔離能力というものは、日本の他のどの地方の山脈よりもはるかに大きいものであろう。[中略]

空想をゆるされるならば（大いにゆるしてほしいのだが）、この隔離性のためにかれら土佐人はその精神的骨格のなかに日本人の固有なるものを多く残し、また大きく翻っておもえば、かれらは唯一の固有日本人（あいまいな呼称だが）というべきものかもしれないのである。

土佐人は酒を飲む。それも甚だしい。国税庁の統計では酒の一人あたりの消費量が日本一であると言ひ、検察庁の統計でも酔っ払っての刃傷沙汰の件数が日本一であるという。これは土佐人にとって愧ずべきことであるか。

そうではなさそうなのである。土佐にあっては、ある者が泥酔のあまり自動車にひかれて死んだとする（そういう例はじつに多いが）。他の諸国ならば、だから言わぬことじゃない、とうとうざまを見たか、ということが反応になるであろう。

「ところが、ここではちがうのです」

と、ある知人がいった。よくやった、とまでは思わぬにしても、その非業の者に対して好感を持ち、そこまで飲んだか、痛烈なことよ、というような、たとえばリングの上で死んだ拳闘選

²⁸ エドワード・サイードは『オリエンタリズム』（原著は1978年出版、日本語訳は今沢紀子訳で1986年に平凡社から出版）で、西洋におけるアジアや中東への偏見を含んだ眼差しをオリエンタリズムと呼んで批判した。以後、「中央が辺境を見る目」を称してオリエンタリズムとしばしば呼ぶ。

²⁹ なお大正15（1926）年発行の『高知市史』には、「此国は昔健依別の称号あり民俗淳朴にして剛健なり、舊藩の時代は上下共に自尊し各其分限に安んじ、衣服の如き藩主自ら元日に紙衣を着用して模範を示せしかば藩主以下綿服以上の装を為す者少なりし」と語られている。後に『竜馬がゆく』などにおいて忌むべきものとして描かれている「悪風」が、「上下共に自尊し各其分限に安んじ」と、むしろ美風として記されているのが興味深い。

³⁰ 司馬遼太郎「竜馬と酒と黒潮と」（『文藝春秋』46-1、1968）。

手をたたえるようなそういう明色の感動をもつ。これはかれらの衒気ではなくかれらの特質なのであり、…この稿の筆者が感嘆するところは、酒量および酒の事故日本一という統計的記録における土佐人の肝臓の強靱さよりも、それをひらきなおってお国自慢にして謳いのけてしまうというかれらの明色性なのである。

これらの言説について、もし司馬に聞いたなら、「これは決して高知を貶しているのではなく、むしろ讃えているのだ」と答えるであろうし、高知人もこれを読んで決して悪い気はしないのかもしれない。しかし「固有日本人」や「明色性」のような「褒め言葉」にも、そこに高知を「他者」あるいは「異世界」とみなす視線が込められていることは否定できないであろう。

『竜馬がゆく』において見られるこうした「都会人の作家が田舎を見下した作品」といえば、夏目漱石『坊っちゃん』が真っ先に連想されよう³¹。東京出身の漱石が松山に感じた「田舎臭さ」と、大阪出身の司馬遼太郎が高知に感じた「田舎臭さ」とは、もちろんまったく同じものとはいえない。さらにいえば、司馬遼太郎の高知描写は決して高知を貶めているわけではなく、むしろ愛すべきものとして描いている点で、直截な蔑視である漱石のものとは一緒にできない、という「擁護」も可能だろう³²。しかしそれでも、大阪の下町で生まれ育った司馬が、土佐（人）の性質を異質なものと設定したことは容易に想像できるし、その異質性の象徴が、「土佐の悪風」とまで書かれた飲酒習慣だったのではなかろうか³³。

次章では、『竜馬がゆく』における「高知と酒」を、小説が連載された1960年代の時代性から読み取ってみよう。

2. 高知と「酒害」

「はじめに」でも述べたように、現在の高知は、酒を全面に出してPRを行っている。しかし、酒の歴史は「飲酒問題」すなわち「酒害」の歴史でもある。日本における「酒害」について、ごく簡単にまとめてみよう。

明治に入ると、封建制度下における社会的秩序からの解放と現金収入の増加に伴う商品経済の進展により、庶民が自由に酒を購入できるようになり、一人あたりの飲酒量が増大した。それとともに、飲酒の社会的弊害も増大してきたのである³⁴。柳田國男はこうした状況を批判的に論じており、江戸時代以前は祭りの時などに限定されていた飲酒が、「[明治以降の]世の中は殆ど毎日の晴であった」「常は無口で、思ふことも言へぬ者、僅な外部からの衝撃にも堪へぬ者が、抑へられた自

³¹ この点については、河田晋作「地域資源としての『坊っちゃん』—『坊っちゃん』とともに歩む松山」(『愛媛国文研究』72, 2022)、村瀬士朗「『坊っちゃん』の松山、『三四郎』の熊本—地域性神話の発生をめぐって—」(『国際文化学部論集』24、鹿児島国際大学、2002)を参照。なおインターネット上には、「松山はなぜ、あれだけ罵倒された『坊っちゃん』を観光資源として使っているのか」という記事が多数見られる。

³² 司馬遼太郎は松山と『坊っちゃん』との関係について、「漱石の『坊っちゃん』は[中略]名作ではありますが、ずいぶん伊予松山の人をばかにした小説でもあります。しかし、松山の人はいけこう喜んでいますがね。坊っちゃん列車とか、坊っちゃん団子とか、松山はなにかにつけて坊っちゃんです。自分たちがばかにされているのを喜ぶというのはなかなかしたたかなユーモアの精神です」(「松山の子規、東京の漱石」『司馬遼太郎が語る日本—未公開講演録愛蔵版Ⅱ』朝日出版社、1997所収)と語っている。

³³ なお司馬遼太郎自身の飲酒習慣については、たとえば『街道をゆく』シリーズにはしばしば酒宴のシーンが登場するが、「さほど酒に強くなかった」「それほど多く飲む人ではない」の情報も見える (<https://precious.jp/articles/-/7134>)。禰原町立歴史民俗資料館には、「禰原街道」執筆のため1985年に取材に訪れたときの写真が展示されており、そこには歓迎の宴でビールで乾杯する司馬が写されている。

³⁴ 青木隆浩「飲酒規範と近代—「伝統」の流用と未成年者の飲酒禁止を中心として—」(『日本民族学』219号、1999)。

己を表現する手段として、酒徳を礼賛する例さへあつたのである」「酒で寿命を縮めたと言はれる人が、俄かに増加したのも残念な世相であつた」³⁵と述べる。さらに柳田は、独酌こそが飲酒量増大の原因であり、近代以前の宴会が「全体にたつた一つの見事な盃から、順に一同が飲むといふことが法則であつた」のに対し、「陶器の小さな猪口が、銘々の膳の上に白く光るやうになれば、宴会は即ち大いなる解放であり、「独酌は更に破天荒に之を自由にした」³⁶と指摘する。

飲酒の害悪が唱えられる中、おもにキリスト教団体を中心にして、禁酒運動が行われた³⁷。1898(明治31)年には日本禁酒同盟会が発足し、上海総領事やハワイ総領事を歴任した安藤太郎が初代会長についたが、発会式が九段メソジスト教会で行われるなど、安藤はじめ幹部のほとんどがキリスト教徒であった。なお高知においても、明治後半の『土陽新聞』には「弊舗共神祭之酒宴ヲ廃ス」「生等契約シ日本酒ノ交際ヤメタゾヨ」という署名入りの「断酒の誓い」がしばしば掲載されている³⁸。

飲酒に対する負のイメージは、高知の自治体史からもうかがえる。実は本稿の当初の構想は、「高知では古来よりいかに酒が飲まれてきたか」を文献資料から明らかにする、というものであった。高知県下の自治体史の「風俗習慣」の項目には、「当地はきわめて酒を好み」などという記述に溢れているのではないかと予想していた。しかし、たとえば昭和32(1957)年発行の『高知市史』³⁹には、酒に関しては「藩政時と著しい相違は手作りの酒と煙草を禁じられた点であるが、これは密造する風が根絶するに至らず、戦後の混乱に乗じて増長する傾向もある」(p.294)という記載があるのである。戦前から1970年代までに発行された高知県下の自治体史には、地元の料理には多くの紙幅が割かれていても、酒に関する記述はほぼ見あたらない⁴⁰。今は県内の市町村のHPには必ずといっていいほど紹介がある酒は、当時は大っぴらに載せるべきものではない、と考えられていたと推測される。

1950～60年代に書かれた「高知の風俗」に関する記述には、酒以外にも否定的な記述が目立つ。土佐人の性質としてしばしば語られる「いごっそう」について、「高知人氣質として知られる「いごっそう」との関連について考えてみよう。[中略]「いごっそう」は桂井和雄氏の「土佐方言記」によると「頑固者」とされているが、この頑固者は一方において「反逆の精神」であるとともに、他方において独立自尊、個人主義とも通じている。[中略]「いごっそう」の個人主義的な面は非協調的となって現われるところから、同業者が協力して同業組合を結成するとかいうようなことを阻んでいる。[中略]高知人特有の「淡白さ」と「激情さ」は金銭に対して淡白であり、合理的、打算的なことも軽視する結果となり、大坂商人の「よいカモ」となっている」⁴¹という記述に見られるように、土佐人氣質を遅れたものとみなす言説が目立つ。

上で引用した中沢誠一郎『高知市—その都市構成と市民生活—』という書物においては、第十二章「市民生活の批判」で「まず第一の問題点は、生活程度が必ずしも高くないということである」⁴²、

³⁵ 柳田國男『明治大正史 世相編』(原著は1931年に朝日新聞社より発行。本稿では『柳田國男全集 第五卷』筑摩書房、1998、p.476)。

³⁶ 前掲柳田國男『明治大正史 世相編』(『柳田國男全集 第五卷』p.477)。

³⁷ 前掲青木「飲酒規範と近代」。

³⁸ 山本久太郎『広告走馬灯—新聞広告百年のあゆみ—』(片桐開成社(高知)、1997)。

³⁹ 重松実男『稿本 高知市史』(高知市役所、昭和32(1957))。

⁴⁰ もっとも新しい『高知県史』(昭和53(1978)年発行)でも、「酒宴」は1ページのみ、きわめて素っ気ない記述である。

⁴¹ 中沢誠一郎編著『高知市—その都市構成と市民生活—』(高知市立市民図書館、1958) pp.203-204

⁴² 前掲中沢『高知市』p.196。

「第二の問題点は、文化生活における断層である」⁴³、「警戒しなければならないことは地に足がつかない頭でっかちの地方文化が出来上がることである」⁴⁴等と述べた上で、

病理現象としても一つ加えねばならないものがある。それは仮小屋生活者のことであって、これは戦後の特有な所産であって、高知市コミュニティのみに存するものではないが、この病理現象はいわば癌のようなものである。…こうした病理現象はコミュニティの膿のようなもので、いずれのコミュニティにも大小の差はあるとしても共通に存在している「止むを得ない悪」といえるが、それを完全に取除くことが近代都市の悲願である…高知市コミュニティは必ずしも立派な住みよい都市とはいえない。遺憾ながら都市診断の立場からいえば、そういわざるを得ないのである。⁴⁵

と記している。筆者の中沢誠一郎は京都市生まれで、執筆時は大阪市立大学理工学部教授であった。高知の街を「病理」と語るこの文章からは、明らかな「都会目線」「近代目線」が感じられる。東京の東邦大学（戦前は帝国女子医学専門学校）から高知県香美郡夜須町の夜須診療所に1946年に赴任し、診療に従事していた上田はるとい人物が記した文章を見てみよう。上田は住民の飲酒問題に興味を持ち、当地で調査を進め、以下のような調査報告を残している。

土佐の気候風土と相まつて、住民は素朴、明朗・開放的である。娯楽機関の少い関係もあつてか酒宴を好む。中流の農家に婚礼があれば、さかもりは3日もつづき、大量の酒を消費す。とくに目立つことは、客に酒を強制する慣習である。次々と飲酒機会が計画され、毎年の秋祭りは部落毎に時を違えて、酒宴の回数が多くなるように社会組織が成り立っている。需要が多いから、必然の結果として安価な酒の供給が生ずる。そのため自家製酒は普遍的な飲料である。[中略]

静岡県に生れ、東京に学んだ私は、高知県の豪華な酒宴様式や執拗な飲酒慣習などを異様に感じた。加えて、診療に従事した過去14年の間に、飲酒に基因するさまざまな事件に遭遇した。傷害、失火、溺死、自傷、交通事故など、枚挙にいとまない。[中略]

60才、無職、師範学校卒 […] 飲酒歴、初飲年令15才、若衆入で先輩がすすめるままに飲酒したが「酒が強い」という世評だった、酒量漸増、24-35才位のときが最高潮、当時清酒6ℓ。戦時、戦後は専ら局法アルコール、自家製甘蔗蒸溜酒などを飲酒、理科実験用として配給になるアルコールを、他校の分まで自分で飲んだ。「アルコールは酒の中で一番うまい、どんなにうすめても甘い。ただ欠点は、酔が廻ってくると、目がかすんでメスチリンダーの目盛りが読めなくなる。舌の感覚その他のうすめ具合の限度を知る能力が狂つてくることである」という。甘蔗蒸溜酒(50%)を、常に4~6ℓ手元に置いてあつた。夕食時に適当に飲み、夜間暫くは読書した、それから夜中に心ゆくまま酒に酔い、朝は飲酒しないで勤務、次第に朝も飲酒するようになり、学校へ酒を持ちこみ、ひるの時間にも飲むに至った。50%の蒸溜酒を1日に1.5~2ℓ飲む。1955年のある夜、突然明状しがたい苦痛に襲われ、医師から肝臓疾患と診断され、絶対禁酒をいい渡された。断酒して治療をつづけ回復してくると再び飲酒、病状が悪化した。同様なことを3回くり返し、さらに2年前、集団検診で胸部疾患を発見され、ようやく現在の絶対禁酒に至った。40才

⁴³ 前掲中沢『高知市』p.197。

⁴⁴ 前掲中沢『高知市』p.198。

⁴⁵ 前掲中沢『高知市』p.200。

頃から手指の軽度震蕩が現れたが、現在はない。飲酒生活清算の結論として、「人間、死の苦痛をいく度か味わわない限り、好きな酒は止められるものではない。」と述べている。⁴⁶

こうした中、高知には「断酒」の機運が高まっていた。その重要人物として2人の名前が挙げられる。1人目は、1958年に設立された高知県断酒新生会の創設者であり初代会長である松村春繁である。松村は高知における労働運動の指導者であったが、やがて酒に溺れ、小学校教諭だった妻に「毎日のように焼酎代を教員室にまでせびりに来られて、とても教員は続けられない」⁴⁷と別居されるほどになる。しかし周囲の人々の助けを借りて断酒を実行し、やがて高知県断酒新生会を設立、のちに全国組織である全日本断酒連盟（全断連）設立の中心人物ともなる。高知は、断酒会の先進地であった⁴⁸。

高知県断酒新生会の記録には、当時の高知における飲酒の害毒が数多く記されている。松村自身が「酒害」に苦しんでいた時は、以下のような状態であったという。

或る時は、下半身を抜けたまま、道端に眠っていたとも聞いているし、もの珍しげに覗きこんだ群衆の視線を、酔眼を開けてじろりと一瞥すると、かれはまた、眠りに落ち入っていったということも耳にしている。

酒が切れるとかれは、かつての知人を尋ねては酒代をせしめて廻るという日が続いた。酒がきれてくる現実を前にして、この所行はどうしようもない、百円といった酒代の無心であったが、市会議員の千頭チヨなどは「松村の乞食」といって面罵したことさえある。だがかれは、恬然としてまた無心の催促に出る、一緒に仕事をしてきた者として、見るに耐えないというより、それは憎悪にちかい平手打ちのような鋭さをもった、千頭チヨの声ではなかったろうか。しかし、アルコールに対して極めて強い、欲求度に落ちこんでいたかれには、この憎悪にちかい言葉に対しても、蚊が刺したほどの痛痒さえ感じないまでに、感情鈍麻と人格荒廃が起っていたのであろう。

かれは市長室にも、よくとび込んで行った。酔ったかれには市長——氏原一郎ではなく、土佐普選連盟以来ともに無産運動をやってきた「ウチ」ということで、やって来ては酒代の強要をしていくのである。[中略]

[...] 昭和二十六年四月、市長に就任した氏原一郎は、〈旅費・交際費二割削減、地鎮祭ニハ酒一升トスルメ五枚〉といった布告を出したばかりだけに、酒で臓器を充満させて、やって来るこの訪問者は、随分と頭の痛くなる存在だったに違いない。

後免の町では、まだ戸も開きそうもない酒屋の前に立って、地団駄を踏みながら、戸の開くのを今か今かと待っているかれを、かりに見かける人があったとしても、この男が、あの戦後第一回メーデーの総指揮をとった松村春繁だとは、よもや想像もつかない程の、かれの転落ぶりであった。⁴⁹

⁴⁶ 上田は「飲酒者の精神医学的研究—高知県下一農漁村の調査—」（『民族衛生』26-2、1960）。

⁴⁷ 社団法人高知県断酒新生会編『断酒会—依存より創造へ—』（西村謄写堂、1983）p.18。

⁴⁸ 三重県でアルコール依存症患者の治療の困難さに苦悩していた医師の猪野亜朗は、1971年秋に高知出身の同僚医師より「高知に断酒会というのがあるらしい」と聞きつけ、「藁をもつかむ思いで」高知を訪問したという（下司孝之『断酒会に寄り添って—下司孝磨伝—』リーブル出版、2018、p.2）。

⁴⁹ 長山瑞巖『元全日本断酒連盟会長 故松村春繁集記 断酒に捧げん』（高知県断酒連合会、1981）pp.127-128。

以下は、断酒会の会員となった者の「酒害」の状況である。

Kは松村春繁氏と同じ町内で青年時代を過ごした。そしてアルコール症になった。

その町は宮尾登美子氏の「權」の舞台となった町で、高知市では非常に古い歴史を持つ町である。町の下段は色街で、上段は海運業者や海に関係のある業者が多く、一杯飲み屋から料理屋まで酒を飲むには事を欠かない町である。Kの小学時代からの遊び友達は全部で十人居た。社会人になってからも彼等は仲が良く、常に飲み友達であり仕事が暇な時などは昼間から十人の中の数人が寄り合って酒を飲むこともしばしばあった。昼間酒を飲むことも別にとやかく言われる様な土地柄ではなく、ごく最近まで酒屋で昼間の立ち飲み客が見られたところである。

その十人のKの友達の中、何と六人がアルコール症になり、昨年Sという海運業者がアルコール性肝硬変で死亡することによって、Kを除く五人が全部死亡した。

一番早く死んだのは船大工のNで、二十九才であった。畳屋のMは断酒会に入ったが止められず、酔っぱらって池に落ちて死に、他の二人は心臓麻痺で眠ったままの大往生であった。アルコール症者では、Kだけが松村氏の指導で断酒会に入って健在である。⁵⁰

「県外の人が、高知にやってきて驚くことは、なんといっても酒ではあるまいか。高知の人が「少々」といっていることが「少々」ではなく、実際には「二升」ということと知って唾然とさせられた話から、その酒の無理強いきたら辟易する外はない、うっかり、下手な辞退でもすると「土佐人の、もぐりじゃ」と云って、嘔みついてこれないとも限らない」⁵¹などという記述は、先に引用した『竜馬がゆく』の一節を彷彿とさせる。

2人目は医師の下司孝磨である。彼の生涯については、息子の下司孝之が記した伝記⁵²に詳しい。岡山医科大学卒業後、郷里の高知へ戻って町田病院や精華園の精神科に勤務する。なお、高知出身の作家・安岡章太郎の小説『海辺の光景』（1959）は、認知症になった母親を閉鎖病棟のある病院へ見舞う物語だが、舞台となったのは精華園であり、現在は海辺の杜ホスピタル(医療法人精華園)となっている。下司は1958年には下司病院を開設し、県内のアルコール依存症患者の治療に尽力した⁵³。

下司孝磨によれば、「戦前の土佐は、あらゆる種類のアル中患者がいて、他県には見られない壮観を呈していたとのことで、戦時中はさすがに減っていたが、戦後いち早くカムバックしたのは土佐一国の名誉とは申し難い。酒飲めば放火する男、意識混濁して動物が見えたり、大蛇に巻き殺されるといった男、記憶を消失した男、心臓が騒ぎ死にかかった男等、じつに多彩である」⁵⁴という。一方、高知に帰郷した下司孝磨を紹介する『高知新聞』の記事には、切迫感がまるで感じられない。

ワキに一升ビンが二本かしまってござる。さりとて、ムム、仕事のひまにやるとみうけた。

⁵⁰ 前掲社団法人高知県断酒会編『断酒会』pp.121-122。

⁵¹ 前掲長山『元全日本断酒連盟会長 故松村春繁集記』p.121。

⁵² 前掲下司『断酒会に寄り添って』。

⁵³ 前掲下司『断酒会に寄り添って』。また下司病院HP(<http://geshi-hp.jp/>)も併せて参照。HPの「院長あいさつ」(現在の院長は山本道也氏)には、「早くから自助グループの重要性に着目し、断酒会を立ち上げることに貢献したことで『全日本断酒連盟発祥の地』としても知られ、病院玄関にはそのモニュメントが今も刻まれています」と記されている。

⁵⁴ 下司孝磨「酒の嫌になる薬」(『高知新聞夕刊』1950年5月12日)。

さても話せる先生じゃなあ！、と早まりめさるな。この酒、れっきとした清酒にはあれど断酒に一役買う妙薬。ここに控えまするは左党にとっては大の鬼門、エメチン療法で今売り出しの下司孝磨博士、当年にとって三十六才。

そもそもエメチン療法とは、アメーバ赤痢や肺ジストマによく効くエメチン、こいつを酒と一しょにのみ下せば二十分、四十分、一時間とたつうちにグワツと吐きだす、吐いてはのみ、のんでは吐き四度、八度、十六度、と続けるうちに酒をみるのもイヤになる段取り。

[中略] 高知市で生れて育ち、岡山医大を出た後も、あらかたは土佐住いの高知っ子、だがもとより酒はゲコなれば、義理にも土佐の乱れ酒いいとはおっしゃいませぬ。日本学術振興研究誌のページをくって、(秋田につぐ酒のみ県高知では、脳溢血の死亡率が高い。)とやっつける。(全国のアル中患者が十万あるとみて、家族を含めて五十万の苦しみを救わん) と思いたったが断酒十万人の悲願。……してエメチンの効き目やいかに⁵⁵

こうした中、松村春繁を中心とした断酒会は活動を続け、1959年3月22日には街頭行進を行った。当日配布したビラは、以下のようなものであった。

酒癖に悩む人々の、よき相談相手として！

私たちは大酒呑みでした。そして沢山の人々に迷惑をかけました。止めようと決心しても又しても酒に親しんで行く意志の弱さ、我ながらはがゆくなりました。[中略]

酒に悩まれる方々および奥様方に、ぜひこの会への御出席をおすすめします。あなたの出席が、あなたの新しい生活の一步でありますように祈りつつ。⁵⁶

当日は10人が街頭行進を行い、帯屋町から駅前までをビラを配りながら、「酒に悩む人々よきたれ！」「私は酒を止めて楽しい家庭を作った!!」と大書きされたプラカードをかけて行進した。連休二日目の人波でごった返す繁華街のど真ん中での行動だけに効果絶大であり、この年の入会者は80名を数え⁵⁷、高知全市に「断酒ブーム」が起きたという⁵⁸。

この時期に「酒害」が問題とされたのは、全国的な動きでもあった。1950年代以降、「酔っ払い」が全国的に社会問題化し、保護センター(「トラ箱」)が主要都市に開設されていく。1958年には、東京都足立区の「バタ屋部落」で、酒をあおり母親に暴力を振るう父親を姉妹が絞殺するという事件が起き、メディアで連日報道され、家庭内における飲酒問題が顕在化した⁵⁹。1960年代に入ると「酒害」イメージが広く流布し⁶⁰、1961年には「酔っ払い」が家族に乱暴するようなことがあった場合、警察が家庭内に立ち入ることができる項目を盛り込んだ「酒に酔って公衆に迷惑をかける行為の防止等に関する法律」が可決された。さらに1950年代末～60年代には、東京オリンピック(1964年)

⁵⁵ 『高知新聞』1950(昭和25)年12月13日。

⁵⁶ 前掲長山『元全日本断酒連盟会長 故松村春繁集記』p.158。

⁵⁷ 前掲社団法人高知県断酒新生会編『断酒会』p.22。

⁵⁸ 前掲長山『元全日本断酒連盟会長 故松村春繁集記』p.159。

⁵⁹ 佐藤ゆかり「『酔っ払い防止法』の再評価とその限界—ドメスティック・バイオレンス、セクシュアル・ハラスメントの概念がなかった時代に—」(『国立女性教育会館研究ジャーナル』14、2010)。

⁶⁰ 中島芽理「アルコール依存症の「癒しの景観」—日本における自助グループの確立と寄せ場での再編—」(『人文地理』74-2、2022)。

の開催決定を契機として、明るく幸せな社会の構築が目指されるようになった⁶¹。そんな中、「幸せな社会」の構築を妨害するものとしての「飲酒」に対するネガティブなイメージが広まっていたのである。

時代を下った1970年代になっても、酒に対する世間一般のイメージはこのように語られている。

どんな調査をしても、お酒には現代的イメージからは程遠い拒否反応がまずあらわれてくる。古い、進歩がない、ドロクサイ、不潔感、女性関係、等々、いわしておけば、際限なくマイナスのイメージが続いてくる。⁶²

それゆえ、日本の女性がお酒を飲むということは「悪い妻」「はしたない妻」というイメージがまだまだ残存している。

現在はその社会通念も大分薄れてはきたが、お酒に関しては男女の差という偏見が残っており、地方において特にそういった傾向がみうけられるし、アンケートの結果においても明確にあらわれている。

また女性の日本酒に対するイメージとして、若い女性の一部には、「平和な家庭の雰囲気」といったイメージのある反面、多くは日本酒とは「酔っぱらい」「泥酔」「2日酔」といった非健康的なイメージをもっている。

そのほか一部には「商取引の道具」「けんか」といったイメージをもっており、総体的に「暗い」というイメージになっている。またこれらに付帯して「下品な」「非健康的」というイメージが多くなっている。⁶³

ここまで挙げてきた酒のイメージが、司馬遼太郎の描いた『竜馬がゆく』に、多少なりとも反映されていると考えるのは、付会とはいえないだろう。すなわち、司馬が「高知と酒」「竜馬と酒」を描く上で、こうした「酒害」のイメージを念頭に置いていたのではないか、という推測である。今でこそアピールポイントとなる「大酒飲みの県・高知」も、当時は決して大々的に誇れるものではなかった。「大酒飲みの竜馬」像は、現代の我々が見るような天真爛漫さに塗り固められたものではなく、「下品」で「非健康的」なイメージをも孕んだものだったのではなからうか。

しかし日本における飲酒は、徐々に「非・問題化」されていった。昭和40年代に入ると、各地におけるコミュニティ作りが盛んに唱えられるようになったが、その際に酒の力を借りること（すなわち「飲みニケーション」）が奨励されたという⁶⁴。また、「わが国全体が明治、大正時代とは違った意味で終戦の痛手から立直り、先進諸国、とくに欧米の文明文化に追いつけ、追いこせの時代でもあった。そんな時「洋風」、または「洋」の字のつくものが近代的でシャレていて、新鮮で、文明的なものを表わす、もっとも端的な言葉として捉えられていた」⁶⁵ことから、先進的なイメージ

⁶¹ 前掲中島「アルコール依存症の「癒し」の景観」。高尾将幸「五輪競技を開催した八王子市—記録映画に見る都市の経験」（坂上康博・来田享子編『東京オリンピック1964の遺産—成功神話と記憶のはざま』（青弓社、2021）には、自転車競技誘致を目指す八王子市が、「親切都市宣言」のキャッチフレーズを掲げ、市民の道徳意識とマナーの向上を呼びかけたり、環境美化運動を行ったという興味深い指摘がある。

⁶² 安藤和雄「市場拡大を求めて—清酒業界近代化の方向—」（『日本醸造協会雑誌』68-3、1973）。

⁶³ 渡辺健一郎「新市場の拡大」（『日本醸造協会雑誌』68-7、1973）。

⁶⁴ 清水新二『アルコール関連問題の社会病理学的研究—文化・臨床・政策—』（ミネルヴァ書房、2003）p.42。

⁶⁵ 稲見宗孝「酒と、広告と、文化と（日本の酒）」（『社会学雑誌』10、1993）。稲見は執筆当時、サントリー株

を持つ洋酒が「新しい酒」として浸透していく。そして酒類販売免許も、以前はさまざまな制限が設けられていたが、2001年に新設店と既存店の間の距離を規定した「距離基準」が撤廃され、続けて2003年には「人口基準」も撤廃され、事実上自由化された⁶⁶。広告においても、タバコが厳しい制限をかけられるようになっていく一方で、酒類は自由な広告が可能であり、酒造メーカーの「社会的責任」が問われることはない⁶⁷。

「酒害」も、表面上は減少傾向にある。「妻からの離婚申し立てにおける理由」において「酒を飲み過ぎる」の割合は一貫して減少している⁶⁸。また「飲む飲まないは個人の自由だから、特にお酒を規制する必要もない」という質問に対し、男性の72.6%が賛成し、反対したのは6.4%にすぎなかったという⁶⁹。こうして酒の「イメージ改善」が進み、今では高知を酒で売り出すことに対する批判が高知の内外から聞かれることはほとんどない。

もちろん、「高知の酒」に問題がなくなったわけではない。

たとえば高知県は、酒類の消費量が、日本でも有数に多い県として知られています。[中略]ところが、酒類の消費量が高知県よりさらに多い秋田県と比べたとき、高知県のほうが酒害はより深刻であるという現実があるのです。これも、アルコール依存が、かならずしも個体要因、薬物要因だけで起こるものではないことを示すものです。[中略]

秋田県と高知県とは、飲酒量そのものにさほど大きな差はありません。ところが、アルコール依存症による入院患者の数が高知県のほうにかなり多いのはまだしも（それぞれの県の精神病院の数や精神病床の数にもよるため）、肝硬変による死亡率も、高知県のほうが断然高いのです。[中略]

同じ第一次産業を主体とした県であるのに、秋田県の場合は、人口移動率も少なく、より安定した社会となっています。これは東北地方全般についていえることなのですが、三世代同居世代の率が高い（独居老人世帯の比率が低い）のです。

しかも、これは非常に重要な事実で、三世代の家族が同居していることによって、酒の飲み方が変わってきます。具体的に言えば、メチャクチャな飲み方をしても、かならずそれにブレーキをかける存在が身近にいるということです。逆に、世代ごとに単独で世帯を構成している社会では、そうした歯止めがどうしても効きにくくなります。

[中略] 殺人事件の発生率、自殺率、交通事故による死亡率、労働災害の発生率などを比べてみても、自殺率を除いて、高知県のほうが秋田県を上回っています。こうした不安定な生活環境は当然、人々にさまざまな社会的ストレスを課すこととなります。そうしたストレスのもとでの飲酒は、精神・肉体の双方に悪影響を与え、それが肝硬変による死亡率の高さにつながっているのではないかというのが私の立てた仮説でした。⁷⁰

株式会社常務取締役であり、本文章はウイスキー「トリス」の宣伝秘話である。

⁶⁶ 木下昌彦「職業の自由事案における憲法判断の枠組み：平成4年酒類販売免許制判決調査官解説を読む」（『法律時報』91-5、2019）。

⁶⁷ 中本新一「アルコールに対する社会的コントロールの必要性」（『同志社政策科学研究』11-2、2009）、植竹立人「アルコール飲料広告規制」（『海外研究員レポート（JETRO）』2006-11）等を参照。

⁶⁸ 前掲清水『アルコール関連問題の社会病理学的研究』p.15。

⁶⁹ 前掲清水『アルコール関連問題の社会病理学的研究』p.38。

⁷⁰ 清水新二『酒飲みの社会学—酔っぱらいから日本が見える』（新潮OH！文庫、2002）、p.28-30。

平成9年には、高知県職員の飲酒運転が大きく取り上げられ、「高知県では、県職員による度重なる飲酒運転に業を煮やした知事が、平成9年10月8日の県議会で「今後、飲酒運転をした職員は、何らかの形で県職員を辞めてもらう方向で事務当局に検討を指示した」と述べ、飲酒運転をした職員に対して「厳罰」をもってあたることを宣言した⁷¹。高知県断酒新生会の活動は、現在も続いている⁷²。現代の日本においては、飲酒運転などが厳罰化される一方で、「まだ子供の内から、酒は「大切なもの」「良いもの」「欠かせないもの」であることを、知らず識らずのうちに心の奥底まで刷り込まれて」おり、「酒に対する底抜けの肯定感」が存在する⁷³。「高知と酒」は、冒頭でタレントが語るような「明るい酒」としてばかりは語れないことを、忘れるべきではないだろう。

おわりに

本稿においては、「高知と酒」のイメージについて検討してきた。『竜馬がゆく』が書かれた時代、酒は今のように「健全」なものとはみなされておらず、「酒害」にまつわる負のイメージで覆われていた。「大酒飲みの竜馬」も、今とはずいぶん違ったものとして描かれ、そして読まれていたのではないだろうか。都市部の読者にとって、竜馬をはじめとする「土佐人」は、際限なく酒を飲み続ける「異世界の田舎者」としてイメージされていたかもしれないのである。

本稿は、「高知と酒」についての研究の、ほんの入り口部分である。今後は、『竜馬がゆく』連載当時、読者たちがこの作品をどのように読み、それによって竜馬や高知にどのようなイメージを抱くようになったのかを明らかにする作業が必要になる。さらに、新聞資料などから、高知県内外における飲酒イメージの変遷をさらに細かく分析していくことが課題となる。

⁷¹ 三浦大介「自治体職員の懲戒制度—高知県の職員に対する飲酒運転懲戒免職処分によせて—」（『高知論叢』63、1998）。

⁷² 高知県断酒新生会のHPは<http://www.kcb-net.ne.jp/dansyu/>。年1～2回のペースで機関紙『断酒高知』を発行している。

⁷³ 藤原暁三『日本禁酒史』復刻版（慧文社、2017。原著は日本国民禁酒同盟により1940年発行）の日高彪による解説。

